



TITLE:

歴史における為政者の役割について (穂積文雄教授記念號)

AUTHOR(S):

伊藤, 幸一

CITATION:

伊藤, 幸一. 歴史における為政者の役割について (穂積文雄教授記念號). 經濟論叢 1966, 97(1): 75-91

ISSUE DATE:

1966-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/133101>

RIGHT:

經濟論叢

第九十七卷 第一號

穂積文雄教授記念號

献	辞	岸 本 英 太 郎	
日露戦争・第1次大戦間の日本経済	堀 江 保 藏	1	
社会思想一論	出 口 勇 藏	22	
トマス・モア『ユートピア』分析の視角	伊 達 功	39	
島の農業について一覽書	野 木 稔 郎	57	
歴史における為政者の役割について	伊 藤 幸 一	75	
王安石新法の貨幣的側面	桑 田 幸 三	92	
イギリス労働組合運動における1889年	前 川 嘉 一	110	
ロックの道德哲学と教育思想	平 井 俊 彦	127	

穂積文雄 教授 略歴・著作目録

昭和四十一年一月

京 都 大 學 經 濟 學 會

歴史における為政者の役割について

伊 藤 幸 一

I

いかなる歴史家が書いた歴史といえども、歴史叙述の出発点としての歴史事実と、復元された歴史事実、すなわち、歴史叙述の到達点としての歴史事実とが同一である保障はどこにもない¹⁾。しかし、どの歴史家も、自分の書いた歴史こそ正しいものだと考える。ところが、歴史家の歴史事実についての見方や考え方は、まさに千差万別である。だから、いろいろな歴史がつぎからつぎへと書かれ、また、そこに、歴史家間の論争が生ずる。

しかし、このように、いろいろな歴史がつぎつぎと書かれ、歴史家のあいだで論争が生ずるのは、単なる各歴史家に個人差があるという理由からだけではないであろう。こうして、論争が生ずるのは、じつは、歴史における論理的発展であり、この論理的発展が一般的には歴史的發展に照応しているからであるということもできよう。なぜならば、どのような歴史家も、一定の歴史的社会背景のもとに生まれるものである。だから、いかなる歴史家といえども、それぞれの歴史的社会経済的諸環境に無関係ではあり得ない。従って、諸環境の変化が、各歴史家に、それぞれの歴史的社会経済的諸環境に応じた歴史観を育てる。たとえば、わが国の場合をみると、終戦前における歴史は、大体、天皇を中心とした歴史であった。それは、何事も、天皇を中心として国難にあたろうとした、いわば、一種の戦時態勢ともいふべき一定の社会経済的環境におかれていたためである。従って、歴史家の多くは、この、社会経済的環境に応じた歴史観ともいふべき皇国史観、ないし、天皇中心の歴史観が歴史家たるもの

1) 堀江保蔵「経済史概説」42ページ。

の常識となっていた。ところが、敗戦によって、その伝統的な価値体系が崩壊した。そして、これまでの天くだりの皇国史観に代って、大衆の力を高く評価した歴史観ともいべき公式主義的な唯物史観が学界を風靡し、天皇崇拜・英雄崇拜の歴史から、いわゆる『人間不在の歴史』が好まれ、あたかも、この『人間不在の歴史』こそ、正しい歴史であるかのごとく考えられるようになったが、これは、やはり、戦前と、戦後のわが国における社会経済的環境の著しい変化によったためであり、歴史家を取りまく、いわゆる、歴史的社会的環境の変化が、多くの歴史家の歴史観を変え、それが、歴史を書き改める結果になったのであるという見方も成り立つからである。

ところが、一方では、一見、全体主義に徹し、大衆の力を高く評価しているように見える社会主義諸国において、たとえば、その代表国たるソビエトや中国では、レーニンの肖像をかがげたり、毛沢東の肖像をかがげたりしており、そこには、英雄や為政者の偉大さを認めているようにみえ、また、個人崇拜熱が全くみられないではないように思える。

げんに、歴史学界において、たとえば、1959年以後の中国では、『歴史人物の評価の基準を何におくべきか』という点から、2世紀から3世紀に名声世に知られた曹操の評価をめぐる大論争が展開され、関係論文が千篇近くも発表されており、それらが、総じて、曹操という一英雄の当時の人民や当時の歴史の発展に果たした役割を認めている²⁾。また、1962年、中国の内蒙古自治区史学会がフホホトで開かれたとき、チンギス・ハーンの誕生800周年を記念して、蒙古史の学術討論会が催され、その討論会の中心問題となった『チンギス・ハーンをどのように正しく評価すべきか』という問題に対して、結局、チンギス・ハーンは、偉大な英雄として認めるべきであるという結論であった³⁾。

こうみえてくると、一見、個人尊重を基礎としているように見える自由主義陣営にあるわが国では、英雄や為政者不用の歴史が好まれ、一見、大衆尊重を基

2) 呉晗「新中国の人間観」佐久間重男・小林文男訳、209-216ページ。

3) 「中日新聞」昭和37年7月5日。

礎としているようにみえる社会主義陣営にある中国では、英雄や為政者有用の歴史が好まれているように見え、それは、想像の逆の現象であるかのように思えるかも知れない。

だが、必ずしもそうではない。たとえば、堀江保蔵教授のごときは、経済史においてさえ、「人間は、経済の主体であるから、これを、ただちに経済発達
の条件とすることはできないが、人間は、決して人間一般として存在する
のではなく、とき、ところによって、ことなる資質、すなわち、気質や性格、知力、
体力をそなえて歴史の舞台に登場するのであるから、その資質のいかんを、
経済発達の一つの条件とすることは、必ずしも不当ではない」とのべられ⁴⁾、
経済史に、英雄や為政者の資質のいかんを検討することの不当でないことを指摘
しておられる。

イギリスの生んだ哲学者パーリンのごときは、名著『歴史的不可避性』なる
論文において、「歴史における決定的な要素は、個人ではなくて、非個人的な
力である」と、信じている人々を嘲笑し、また、「歴史家が、チンギス・ハ
ーンやヒットラーを全く悪人ときめつけ、これらを糾弾するのではないか」と⁵⁾
心配し、また、別のところでは、「ナポレオンやチンギス・ハーンやヒット
ラーなどのおこなった殺戮を裁くのが、歴史家の義務である」と⁶⁾のべ、歴史家
が英雄や為政者を無視してはならないことを強調しているが、ローズベリーや、
トインビーなども、このパーリン同様に、個人主義崇拜の念をもって道徳的倫
理的な判断を下すことが、歴史家の一つの任務であるという考え方をしている。
また、ワグナーのごときは、経済学においても、その研究の必要であることを
認め、「社会問題を正当に取扱うためには、経済学は、一層倫理的科学として
の特質と意義をもたなければならない」と⁷⁾いうことを強調している。

また、一方では、新民主主義革命を達成した中国の文芸界では、英雄のとり

4) 堀江保蔵「経済史概説」24ページ。

5) Sir Isaiah Berlin, *Historical Inevitability*, 1954, p. 42.

6) *Ibid.*, pp. 76-77.

7) Ad. Wagner, *Rede über die sociale Frage*, Berlin, 1872, S. 4.

あつかい方について、たとえば、馮雪峰が、「英雄も大衆の一人であり、英雄といえども、大衆のなし得ることしかなし得られない」とのべ、人物やその環境を理想化したり、図式化すべきでないことを主張し⁸⁾、英雄崇拜化を鋭く批難し、いかにもマルクス・レーニン主義に徹した中国における社会思想がうかがわれ、為政者の歴史における役割を高く評価してはならないこととともに、大衆の果す役割の重要性を主張している。

このように、現存する資本主義国においても、社会主義国においても、結局、その社会構成の如何をとわず、歴史における英雄や為政者についての考え方は、必ずしも国によって統一されていない。それは、一つには、歴史における英雄や為政者の役割を正しく論ずることが非常にむつかしく、どうにでも考えられる点があるということ。また、他の一つには、今日における大半の歴史家の歴史観となっている唯物史観において、この点が必ずしも妥当な理論でのべられていない点があるためではなからうか。

II

まず英雄や為政者の歴史における役割を正しく論ずることがむつかしく、英雄や為政者の評価がどうにでもすじを通すことができるという点について検討してみれば、その評価するひとの歴史観が違ったり、階級的立場が違えば全く相反する評価がなされて⁹⁾、しかも、そのいずれの評価も、一定の歴史観のもとにおいて、それぞれ相当の理由があり、従って、どちらが正しい評価であるかは、それぞれの歴史観がどうであるかという問題にこそなれ、英雄や為政者の歴史における役割の見方が妥当であるか否かの問題にはならないということがわかる。

たとえば、日本史における幕末の士、伊井直弼を評価して、一方では、伊井直弼が安政5年にハリスと通商条約を結んだことについて、伊井直弼は、世界

8) 「中日新聞」昭和40年3月9日夕刊。

9) 呉晗「新中国の人間観」佐久間重男・小林文男訳、253ページ。

の大勢をよく認識し、日本の植民地化を防ぎ、日本を国際舞台に早く登場させようとしたわが功勞者であり、その決断力のよさは大いにたたえられるとし、当時の伊井直弼の果たした役割を高く評価することもできようが、他方では、この伊井直弼の条約の締結は、勅許を待たずしておこなった独断の締結であり、しかも、その独断は、国体を解せぬ越権行為であったから、後に水戸の浪士によって殺されざるを得ない悪人だと評価することもできよう。

また、フランス史におけるルイ 14 世は、一方では、まさに『太陽王』とよばれ、専制君主の典型とされ、軍制を改革して常備軍を設け、重商主義のもとに植民地開拓につとめ、フランスのヨーロッパにおける地位を大いに高めたフランス民族発展のための功勞者として高く評価されるが、他方では、この、いかにも功績大であるようにみえるルイ 14 世の積極的政策も、じつは、外部に対する政策につとめすぎて内部のフランス民衆の生活状態の向上につとめない、いわば、内部との調和をかえりみない不調和政策であり、真にフランスの市民や農民の生活向上につとめない為政者であった、だからこそ、ついに、フランスの大衆の不満をかう結果になり、フランス革命をおこす原因をつくったのであるとして、フランス市民を苦悩におとしいれた悪王であるという評価もなりたつであろう。

そのほか、蒙古史におけるチンギス・ハーンについて、一方では、全く不毛の地と考えられる漠北の地に住む少数の遊牧民を率いて、短期間に三洲にもまたがる諸民族をふるいあがらせ、広大な地域に大元帝国を樹立せしめた偉大なる英雄であると高く評価されるであろうが、他方では、チンギス・ハーンのとった遠征過程における暴力行為、とくに、貴重なる文化をことごとく破壊させたり、多くの良民を殺させた行為は、まことに兇悪なる為政者であったとして、悪為政者とすることもできよう。

また、ドイツ史におけるヒットラーについて、一方では、第 1 次世界戦争において破れ、しかも、多大の賠償金を課せられたドイツを、まことに短期間に、再びフランスやソ連を敵にまわして戦い得る国にまで発展させた偉大なる為政

者であるといい、これまた、チンギス・ハーンの場合と同様に不屈の精神をたたえ、ナチを指導した各種の政策が高く評価されるかも知れないが、他方では、ヒットラーの戦時中にとった行為はチンギス・ハーンにおとらぬ兇悪極まるものであり、ことに、非戦闘員を大量虐殺することを命じたことなど、人道上許し難い極悪人であるという批判がなされるであろう。

このように、英雄や為政者の歴史上における評価は、全く相反するものになり得て、しかも、その、どちらの評価が正しくて、どちらの評価が正しくないかということを、一概に論ずることはできないように思える。

だが、ひと、あるいは、その、どちらか一方だけが正しいといい、また、その反対側が正しいといい、あるいは、両者の評価とも正しいといい、ときには、両者の評価とも、すべてが研究し尽くされていないとして正しくないというかも知れない。しかし、これらの評価は、おそらく、いずれの場合においても、ある種の歴史観にたった評価であり、ある種の目的をもった評価である。

ところが、ある種の目的を果すために、歴史における英雄や為政者を評価しようとするもの、つまり、目的のために歴史を利用しようとするものにとつては、都合のよいところだけをとりあげて、都合のよいように論じようとするであろう。もし、そうなれば、それらが歴史ではなくなるのはいうまでもない。だが、この似而非歴史が、実際にはすくなくないのではなからうか。そして、それが、いろいろな混乱を招いているのではなからうか。

ここにおいて、英雄や為政者の歴史上に果す役割についての研究のむつかしさがうかがわれるとともに、その評価を正しく論ずることの重要性がわかり、ここに、この研究が大いに高められなくてはならない理由があるように思える。

ところが、わが国における歴史家の誰もが、必ずしも、この研究の重要性を論じてはいない。

それは、やはり、今日における大半の歴史家の歴史観ともいうべき唯物的史観が、英雄や為政者の歴史における役割を軽視しすぎる嫌いがあるからではなからうか。

III

およそ、唯物史観において歴史をみようとするものは、まず、人類の社会生活が、本質上実践的であると考え、この実践は人間の自由なる行為であるとする。また、その行為は、必然性の理解にもとづいて、これに適応した人間の歴史行為であるとする。従って、唯物史観においては、人類の社会生活とは、実は、歴史的实践であるという考え方をしているわけである。また、このような歴史的实践とは、まず物質的生活自体の生産に出発し、物質的生产における社会関係が、階級的に構成されているという考え方から、階級闘争が社会的発展の原動力であると考え¹⁰⁾、それは、人間の物質的生活の生産様式の発展のなかにみいだされるものとし、人間の物質的生产諸力の一定の発展水準に照応した生産諸関係を抽出することによって、人類社会発展の法則性と、その原動力を明らかにしようとする。そして、人類の全世界史を、より低い社会経済的構成の、より高い社会経済的構成による交替の自然史的過程であるという考えでつらぬき¹¹⁾、しかも、あらゆる思想や、あらゆる諸傾向の根元を、この物質的生产諸力の状態のなかからみいだそうとする。

かくのごとく、唯物史観においては、社会を生産力の発達に照応する、いわゆる『社会的構造』の歴史的發展において把握しようとし、この把握がなされて、はじめて、人間存在の歴史的構造が正しく解明せられるものである¹²⁾とする。従って、唯物史観においては直接英雄や為政者について研究する必要性を認めていないわけである。まして、英雄や為政者が社会を左右する重要なものとは全く考えない。かくて、ここに、いわゆる、人間不在の歴史の正当性が立証されているのであるかも知れない。

しかし、この唯物史観にたった歴史観が英雄や為政者の歴史における役割を間違っ

10) 向坂逸郎、史的唯物論と社会科学、「社会科学講座」Ⅰ、社会科学の諸系譜、36ページ。

11) 宮川実「社会発展史」10ページ。

12) 田中豊喜「経済史の対象と方法」27-30ページ。

非唯物史観なる歴史観を問題にすべきであろう。たとえば、自分こそ正しい唯物史観の立場にたっているものだと考えるもののなかに、為政者も、じつは、大衆のなかからでたものであり、また、いかなる為政者も、大衆の動きと別個に行動できるものではないから、大衆と遊離したり、大衆の意志に反して、大衆を為政者の望み通りの方向へひっぱっていけるものではないと考え、それらをもとに、ついには、いかなる為政者も、じつは、大衆の意志にしたがわされているのであるという考え方をする。また、なかには、大衆によって、為政者というあやつり人形が、大衆の意志にしたがって行動をしているものであるという考え方をするものさえでて、為政者の歴史上における役割を論ずることがナンセンスであるという結論を導きだすものまであらわれる。

げんに、唯物史観においては、社会現象は、自然現象において、たとえば、引力の法則が作用するがごとく、一定の法則によって支配されて、この法則、つまり、経済法則が、人間の意志とはかかわりなくおこなわれている経済発展の過程を反映せしめるものであるとされ、いかに偉大なるひとでも、これらの法則を認識し、社会のために作用することはできるが、この経済法則をなくしたり、つくりだすことはできないといわれている¹³⁾。マルクスも、この点について、「人民が歴史の主要な作用力であり、人民がいなければ、いかなる偉人も、王国や帝国をたてたり、戦争をしたり、歴史を創造したりすることはできない」とのべ¹⁴⁾、英雄や為政者が、単独で、全人民を左右することのできないことをほのめかしている。

だが、そのことは、必ずしも、英雄や為政者の歴史上における役割が全くとるに足りないものであるということと全く同じことではない。たしかに、たとえば、さきにあげた、わが幕末の伊井直弼が、大衆の意志にある程度順応したり行動をしているあいだは、大老として、政治的権力を誇り得る地位を保ち得たが、大衆の意向を全く無視したるがごとき行動、たとえば、多くの支持を得て

13) 岡部寛文「一般経済史入門」18ページ。経済学批判、序言。(宮川実「社会発展史」12-13ページ。)

14) K. Marx, *Interpretation of History*, Cambridge, 1950, pp. 501-507.

いた徳川慶喜をしりぞけようとしたり、天皇に対する伝統的な考え方を無視するがごとき行動をとるに至って、ついに、大衆が伊井直弼を支配的な地位にとどめておこうとしなくなり、その結果が伊井直弼暗殺という事態を招くに至ったのであり、それは、いわば、大衆が伊井直弼の存在を左右したというようにみえ、ここに、歴史を左右するのは大衆であるという例があると考えられるかも知れないが、それとは逆に、たとえば、毛沢東は、永年苦しんできた中国農民を、共産党の旗のもとに次第に統一し、ついに、いわゆる中国革命をなしとげた一大英雄であるとみることもできるのではなかろうか。

しかし、このことは、英雄や為政者が歴史をつくったのであるということを手張しようとするためのものではない。毛沢東は、一見、中国の大衆を共産党の旗のもとにひっぱっていった一為政者のようにみえるかも知れないが、そう簡単にかたづけられるものではない。イギリスのカンタベリー教会の僧ヒューレット・ジョンソンは、1952年に中国を訪れ、「毛沢東は、人民とともに生活し、人民とともに苦しみ、人民とともに働き、しかも、そこに人民に団結と協力を教えた、いわば幾億かの中国人民の熱愛する指導者であって、中国人民の崇拜的である」とのべており¹⁵⁾、大衆を無理矢理ひっぱっていったのではないことを示している。もっとも、この中国人民の崇拜的である点は、一見、毛沢東が中国人民大衆を意のままに動かし得る可能性をもっているようにみえ、従って、それがその現実を想像する点になっているかも知れない。しかし、実際においては、そうではない。

おそらく、真のマルクス主義者ならば、いかなる為政者も、大衆を左右したり、歴史を左右するとは考えないであろう。また、今日の中国の為政者を、ナポレオンやチンギス・ハーンと同じような権力の誇を好む人物とはみないのではなかろうか。

だが、実際には似而非唯物史観にはたてど、正しい唯物史観になっていない歴史家が、意外に多い。従って、この似而非唯物史観に対する批難が、あたか

15) 岩村三千夫「毛沢東」195-196ページ。

も唯物史観への批難のごとくとりあつかわれている場合が多いのではなかろうか。そこで、ここでは、二三の例において検討することにした。

VI

まず、いま、革命をなしとげた現在の中国における史学者が、はたして為政者の歴史における役割をどのような史観にたってみているかを、かつての蒙古の為政者チンギス・ハーンについて論じた、余元鑫氏と周慶基氏の所説をうかがうことによって、検討してみよう。

余元鑫氏は、『成吉思汗伝』なる著において、「われわれは、12世紀から13世紀のはじめにおいて、全蒙古地区の広大な地域にわたる人民大衆が、統一への要求をもったがために、蒙古の統一がはじめて可能になったのであるという社会発展についての考え方を理解しなければならない」とのべ¹⁶⁾、チンギス・ハーンという為政者が、全蒙古人民を左右する人物とは考えていないことを示し、また、この為政者、チンギス・ハーンが、偉大なる指導者としての役割を果たしたのは、「チンギス・ハーンの行動が、社会の発展の法則にあっていただけである」とのべ¹⁷⁾、いかにも唯物史観の歴史観にたっている点をのぞかせている。そして、興味深いことに、「たとえ、当時、チンギス・ハーンがいなかったとしても、蒙古の統一は、おそかれはやかれ実現したであろう」とい¹⁸⁾、「チンギス・ハーンが、当時、世に与えたのは、蒙古統一の過程を加速したにすぎないのである」とのべ¹⁹⁾、チンギス・ハーンの蒙古史において果たした役割が、「蒙古史の発展速度をはやめたか、おくらせたかのいずれかであり、また、その蒙古史の発展速度に対する影響も、歴史の発展に決定的な影響を与えるほどのことにはならなかった」とのべ²⁰⁾、チンギス・ハーンという為政者の歴史上に果たす役割を過大評価すべきでないことを強調している。このような点

16) 余元鑫「成吉思汗伝」上海人民出版社、90ページ、伊藤幸一訳、藤成印刷、81ページ。

17) 前掲書、90ページ、前掲訳、81ページ。

18) 前掲書、前掲訳。

19) 前掲書、前掲訳。

20) 前掲書、前掲訳、82ページ。

は、周慶基著『成吉思汗』においても、余元龔とほとんど違わず、「ときの為政者たるチンギス・ハーンが、かくも偉大なる事業を成就し得たのは、チンギス・ハーンの考え方と、当時の蒙古社会の発展の要求とが、合致したからである」ということを各所で強調し²¹⁾、チンギス・ハーンだけの偉業として高く評価しようとしていない。

また、この両氏は、たんに、為政者の歴史上における役割を必要以上に過大評価すべきでないという抽象論だけでなく、為政者は、大衆のすべての代表者でなくて、大衆の一部の階級の代表者であり、従って、大衆の一部を擁護する働きをなしていたことを指摘し、たとえば、余元龔は、チンギス・ハーンが自分の所属する階級、つまり、蒙古封建領主階級たちの、いわゆる階級の利益を代表し、この大衆の一部にあたるものたちが人民大衆から搾取したのであるということを強調し、つぎのようにのべている。すなわち、「チンギス・ハーンを代表とする蒙古の支配階級は、蒙古人民に対する搾取が、主として軍役制度の上にあられ、蒙古人民の15才以上のもの、つまり、兵器のとれるものは、みな戦士であるとされ、しかも、この戦士は、ふだんは無報酬であったばかりでなく、毎年、ノヤンの所属する封建領主の家畜やその加工品を、いくらか納付しなければならなかった。しかも、蒙古人民は、こうして、戦士になることによって、賦役が免除されることはなく、本人が出征すると、その妻や親戚のものがかわって負担しなければならず、また、その貢納率は、定められてはいないが、みな、民戸の牧畜の多少によって徴収され、また、蒙古兵士の唯一の収入は、戦争に勝ったときの賜賞とか戦争中の捕獲物であったが、捕獲物が、すべて兵士のものにならず、それは、均等配分といわれながらも、実際には、上から下への配分であり、一部は、チンギス・ハーンに献上するものとして、とくに残し、その他も、蒙古の本部で戦争にいかないものに対するわけまえとしなければならなかった」といい²²⁾、英雄一般の兵士、すなわち、平民の所得

21) 周慶基「成吉思汗」17、45ページ、その他。

22) 余元龔「成吉思汗伝」上海人民出版社、91ページ。

が、非常にすくなく、大半の掠奪物が蒙古封建領主にとられ、従って、一般の蒙古人たちの生活が非常に苦しかったことを強調し、チンギス・ハーンが、大衆全体の代表者というよりも、大衆のうちの一部の階級の代表者であったからであるという点を指摘している。

これらの諸点から、余氏も周氏も、ともに唯物史観に立脚しようとしていることは明らかであり、中国における史学界の『為政者の歴史における役割』についての考え方の一般的傾向が推測できるのではなからうか。

だが、為政者の歴史における役割を、過大評価しない点や、その役割が大衆の一部の階級を擁護するものである点を指摘しているのは、中国における唯物史観の特徴であるとしてのべようとしたのではない。

たとえば、チンギス・ハーンと並べて例をあげられる、第2次世界大戦中におけるドイツの為政者ヒットラーについて論じた塚本健氏の『ナチス経済』なる著においても、その傾向がうかがえるように思える。ことに、塚本氏は、ときの為政者ヒットラーの諸行動がすべて国家独占資本主義の形体において、一部の資本家を擁護しようというものであった点を強調し、「ヒットラーを首相とするナチスのとった政権安定策は、いかにも資本主義的な方法で、資本蓄積機構を再編成し、国際収支危機やインフレに対する社会不安を解消することにより成したのではあったが、これを、実際に担当せしめたのは、H・シャハトであり、このシャハトなる人物は、大工業家、ユンカであり、保守派の一党に属していたひとであった」とのべ²³⁾、ヒットラー政権が、ドイツ人民の一部のものの代表によってなされたものであることを指摘し、さらに、1935年以降のヒットラーの一連の手紙をとりあげ、ヒットラーが、「シャハトは、原料生産問題よりも、外国貿易問題に関心をもち、従って、生産原価の比較的高いことに不当な関心を払い、これらの産業の生産能力を増すことに対して、適当な基金を支出することをしぶった、いわば、国家の利益よりも、産業家の利益を代表している」ということをのべている点を指摘して²⁴⁾、その事実であったことを示している。

23) 塚本健「ナチス経済」239ページ。

以上の例によってもわかるように、史学者の間で一般的に考えられている唯物史観における為政者の役割についての考え方は、まず個人が歴史を創造するという観念論的な見解を斥け²⁵⁾、常に為政者を大衆と結びつけること、とくに、大衆の一部の階級と結びつけることにおいて、為政者の歴史における役割を論じようとしたものであることがわかり、その限りにおいては、似而非唯物史観というよりも正しい唯物史観になっているものといえよう。

V

このように、歴史が、英雄や為政者によってつくられるものでなく、また、いかなる英雄や為政者といえども大衆の中からでたのであり、大衆の支持を得てはじめて英雄または為政者として貢献できたのである、という点、さらには、為政者が大衆の一部の階級ないし団体の代弁者または擁護者である、という考え方については、これを批判するものはいないであろう。

だが、たとえば、余氏がのべているがごとく、13世紀における蒙古民族の発展は、チンギス・ハーン以外のものが為政者になっていても、早かれ遅かれ達成されていたとする考え方、つまり、誰が為政者であっても当時の蒙古民族の発展は変らなかったという考え方については、どうであろうか。

もっとも、この余氏の説明が、当時の蒙古民族の発展の趨勢が社会発展の必然的合法的なものであったから、たとえチンギス・ハーン以外の為政者の出現においても、当時の蒙古民族の発展は当然の趨勢であり、従って、この趨勢には変化がなかったということを指摘せんがための一つの表現方法であると解釈するならば、これまた、批判の余地はないかも知れない。

だが、もし、そうでなければ、疑問がでてくるのではなからうか。なぜならば、チンギス・ハーンの蒙古史における役割は、ニュートンやガリレオが自然科学史において引力の法則や振子の法則を発見する場合のごとく、遅かれ早か

24) B. H. Klein, *International Military Trials, Nazi Conspiracy and Aggression*, VII, p. 564. B. H., S. 35. (前掲書, 252ページ。)

れ誰かが発見したものであって、とくにニュートンやガリレオが問題ではないとみるのと同様に、チンギス・ハーンが誰であっても問題でないとするには問題があるからである。

ブレハーノフが、「もし、ルイ15世がもっと確固たる信念のもち主であったり、また、彼の代りに別のたとえば、ルイ14世のような王がいたならば、フランスの領土は、もっと大きくなっており、その結果、フランスの経済的政治的發展のあゆみは、違ったものになっていただろう」と考えたり、さらには、「もしも、ルイ15世があれば好色漢でなく、彼の愛妾が政治にくちばしを入れるようなことがなかったならば、事件はあんなにフランスに不利なものにはならなかったであろう」とのべている²⁵⁾が、このブレハーノフの考え方も、もし、大衆と結びつけた上でのものであるならば、たしかにルイ15世は、フランスの経済的政治的な発展、ないし、当時のフランス民衆の動向に対して、かなり重要な役割を果たしていたとみることが、必ずしも間違いであるとはいえないのではなからうか。

同様なことは、たとえば、ピオヴェザーナが、革命の理論的な天才、レーニンの場合にもあてはめて考えることができることを指摘している点についてもいい得ることではなからうか。すなわち、いかに軍事的にトロツキーが統率していたとはいえ、10月革命の計画をたてたのはレーニンであり、『機会をつくる』歴史的な人物であり²⁷⁾、ロシア史におけるレーニンの役割も認めてよいように思える。また、そのほか、たとえば、ナポレオンにおいても、ナポレオンという一大英雄があって、はじめて当時のフランス軍が、あの勝利を博したのである。げんに、かれがいなくなると、敗戦の憂目をみざるを得なかったことは、それを示しており、ナポレオンの歴史における役割を見逃すべきでないことを指摘している²⁸⁾。このナポレオンの歴史上における役割の大きかったこ

25) Gino K. Piovesana「現代ソヴェト史的唯物論」五十嵐仁訳、326-327ページ。

26) Г. В. Плеханов, К вопросу о роли личности в истории, 木原正雄訳、岩波文庫、48-50ページ。

27) Gino K. Piovesana, *op. cit.*, 345ページ。

28) *Ibid.*

とについては、たんにピオヴェザーナばかりが強調しているのではなく、H・G・ウェールズも、ナポレオンが、もし王朝制度のとりことならなかったならば、新世界の創建者になれたかも知れなかったのに、かれが旧世界の養子になることを選んだがために、粗雑な専制君主の一種に終ってしまったとのべている²⁹⁾。

また、ドイツの一為政者ヒットラーは、彼の著『予の闘争』において、「およそ国事は、多数決を許さず、いつに責任ある当局の決定による……」とのべており³⁰⁾、この決定、つまり、当時のドイツの為政者ヒットラーが軍隊の動きを左右することの決定は、とりもなおさず、ヒットラーが、当時のドイツ軍隊の行動を他の指示を受けない、いわゆる、自分の自由な状況判断によって決定するのだという意味であり、そこには、ヒットラーという為政者が、当時のドイツ軍の動きを左右する重要な役割を果たしていたことを示しているものと考えてよいのではなかろうか。

同様なことは、蒙古史における偉大なる為政者チンギス・ハーンについても、たとえば、元朝秘史に、「チンギス・ハーンが妃のイバカに対し、『なんじの父、ジャガ＝ガンボは、なんじに200人のインジュ(嫁入のときの従者)とアシク＝テムル、アルチクの2人の大膽職を与えた。それで、おまえは、ウルウトの民に赴のだ』……」と記されており³¹⁾、また、「ジュルチエダイには『おまえにはイバカを与える。4000戸のウルウト族を支配せよ』と命じた」ことが記されており³²⁾、当時の為政者チンギス・ハーンの大衆に対する決定権があったこと、しかも、その決定権は、当時の大衆の動きと無関係では語られないにしても、チンギス・ハーン個人の考えによったものであるというべきではなかろうか。

かくて、為政者が誰であっても同じ結果になっていたとする余氏の唯物史観には、飛躍または無理があるように思える。もっとも、正しい唯物史観においても、あるいは、小泉信三氏が「傾向的に誇張せられ、歪曲せられた理論であ

29) G. H. Wells, *The Outline of History*, Cap. 37.

30) 本多熊太郎「人物と問題」288-289ページ。

31) 岩村忍「元朝秘史」136-137ページ。

る」といい³²⁾、土田千代氏が「人間の行動実践に出発しておりながら、人間性
の見方があまりにも狭少である」といっている³⁴⁾ことが、全くまとはずれとは
いえない点があるかも知れない。なぜならば、唯物史観といわれるもののほと
んどものが、ややもすれば、為政者と大衆との関係の検討を軽視しすぎる憂
いがあるように思えるからである。

穂積文雄教授が、「唯物史観はたしかに一つの真理であるが、それは、全部
の真理ではない。したがって、それでもって、すべてを断ずればむりが生ずる
のではなからうか」とのべておられる³⁵⁾のは、まことに味わうべき点があるの
ではなからうか。とくに、唯物史観だから正しい歴史観とはすれば、正しい歴
史観だから唯物史観の立場にたとうというような考え方をしないものにとつて
は、よきいましめではなからうか。

ことに、唯物史観または似而非唯物史観において、為政者が大衆の一部の代
弁者であることがいかに正しい理論であっても、その為政者という一個人と、
その代弁者たることを望む大衆の一部や大衆とが、どのような関係にあって、
どのような相互作用がなされ、その結果として、歴史を動かす大衆がどのよう
に行動したかの検討を省略して、すべてを大衆に転化する考え方であつては、
唯物史観が観念論を批難しておきながら、結局、観念論の立場にたってしまう
憂いがでてくるのではなからうか。

史学者たるものは、いまいちど、唯物史観の長短をみとめ、人間不在の歴史
の長短を再検討すべき必要があるのではなからうか。ことに、歴史は、一般史
としてあるのではなく、すべて特殊史であるから、趨勢をもって、特殊史の検
討を怠り、公式主義に走るというようなことなく、特殊な条件たる個々の史実、
とくに、それぞれ特有の個性をもって登場する為政者が、いろいろ考えた諸
政策を実行するときにおける為政者や、為政者が自己の代弁者であることを望

32) 前掲書、137ページ。

33) 小泉信三「マルクス死後五十年」116ページ。

34) 土田杏村全集、Ⅱ、408ページ。

35) 穂積文雄「近代社会思想史」209-213ページ。

む大衆、あるいは、大衆の一部のものとの相互関係の検討は勿論のこと、その他の客観状勢、とりわけ地理的歴史的な各種条件との関係などをよく検討し、また、それらの条件のからみあいなどを、総合的且つ有機的に考察し、そこに登場する為政者の能力や性格が、社会的経済的な面に、どのように適応ないし作用するかという点を考えなければならないのではなかろうか。

E・H・カーが、歴史とは、現在と過去との対話であるといい³⁶⁾、また、出口教授が、これを、見方をかえて、Geschehen(過去の事実)と Historie(過去に関する研究者の批判的意識)との両者が統一されたものであるとっておられる³⁷⁾のも、たんに、一般史だけを対象にされたものではなく、それぞれの特殊史の場合にもあてはまることであり、また、この歴史は、各歴史家が、過去に書かれた歴史をまねることや公式主義にはしらず、資料の蒐集、検討によって、周匝致密な研究に没頭する決意をもってのぞむべきではなかろうか。

36) E. H. Carr, *What is History?*, 清水幾太郎訳, 182-185ページ。

37) 出口勇蔵, 経済学史に関する最近の見解, 「経済論叢」第93巻第5号, 28-31ページ。